

# 扉の向こうへ

## 第1部 どうして私が…①

8畳ほどの細長い部屋が、永嶋聡さん(45)「北杜市」の世界のすべてだった。

大きな窓からベッドに日が差し込む。目が覚めると、足元に積んだ本をよけて机に向かい、ノートパソコンの電源を入れる。

以前、都内の製紙会社に勤めていた。職場で人間関係に悩み、息苦しさが増す日々。ついに限界が来た。携帯電話の「連絡先」から仕事関係者を丸ごと消去し、逃げるように会社を辞めた。中学卒業まで通った実家の白室の扉を強く閉めると、奥に息ができるようになった。

それから5年。部屋を出るのは台所と風呂とトイレに行くときくらい。眠くなったらベッドに横になる。起きたらまた、パソコンに向かう。目の前の液晶画面が、社会とつながる唯一の「窓」だ。

検索サイトに、〈ひ〉〈き〉

## 山梨発 ひきこもりを考える

しまったのか。50代に向かう無職の男に可能性なんてあるのか。ネットの海に答えを探した。

両親は清里でペンションを経営していた。バブル経済の絶頂期。宿泊客は絶えず、二人はいつも忙しく働いていた。中学卒業後、家を出るま

では手伝ったりもした。その父母も80代後半。ペンションはとうの昔にたたみ、貯蓄と年金で暮らす。舞い戻った当初は会話もあったが、いまは距離を置いた関係が落ち着いている。親にとって40を越した息子がひきこもっているなんて、やるせないんだ

ろう。腹が減ると台所に行き、残っている材料で食事をつくった。例えば起床後はサラダとハムとスクランブルエッグ。あるとき気付いた。目の前の食材は、すべて親が買ってきたものだ。長年まっとうに働

ひきこもってから3年。20代のころに趣味で集めた古い専門書を、ネットのオーク

に入れていた。それに比べて自分は。以来、夕食は親が取り置いてくれる余り物を食べるようになった。

シヨンに出してみた。思いもよらぬ高値が付いた。出品するたび、飛ぶように売れていく。発送のため、徒歩で片道40分かけて地元の郵便局に通った。よく顔を合わせる局員と、たわいない会話を交わすようになった。細いけれど、何か社会とつながった気がしていた。

金で車を運転できるようになる。教習所に通い、免許を取った。

最近親の車を借り、部屋の外に出ることもある。今度、ひきこもり当事者の会が甲府で開かれると聞いた。行ってみようと思う。

# 8畳間が世界のすべて



パソコンに向かって一日のほとんどを部屋で過ごす永嶋聡さん。枕元の窓からは朝の光が差し込む 北杜市内

この連載へのご意見や感想をお寄せください。郵便番号400-8515、甲府市北口2の6の10、山梨日日新聞社編集局「扉の向こうへ」取材班(ファクス055・231・3161、電子メールkikaku@sannichi.co.jp)。

交流サイト「フェイスブック」に「扉の向こうへ」の専用ページを開設しました。集いの場の告知など関連する話題も発信します。

「送っていいか」。顔見知りの局員の一言がきっかけだった。車の運転免許も持っていない惨めな人間と思われている。一瞬で、そう受け止めてしまった。結構ですと、断る声がこわばっているのが分かった。

職場で、学校で、家庭で、ある日突然動けなくなり、立ち尽くす。「なぜ」どうして。自問自答を繰り返しながら、居場所を探し求める日々。第1部は、ひきこもる人々の日常を追った。

〈扉の向こうへ〉取材班

# 扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える

## 第1部 どうして私が…②

「もうだめだ。辞めよう」  
2009年8月、永嶋聡  
さん(45)「北杜市」はリタ  
イアした。

勤めていた都内の製紙会  
社で仕事がなかなか覚えら  
れず、周囲との関係がぎく  
しゃくしていた。そこへ、  
好意を寄せてくれていたと  
思っていた同僚の女性から  
突然無視されるようになっ  
た。

一生懸命取り組んでいる  
のに。精いっぱい優しく応  
じてきたつもりだったの  
に。「何をやってんだめだ  
な」。ひどく落ち込んだ。

30年前。実家のある北杜  
市の中学を卒業し、働こう  
と学校側の紹介で職業安定  
所を訪ねた。応対した男性  
職員から聞いた言葉は、今

## 職場で空気読む日々

も忘れられない。「紹介す  
る仕事はない。帰って」。  
おそらく書類から不登校だ  
ったことが分かったのだろ  
う。

小学4年生のころ、父親  
の転職で埼玉から引っ越し  
てきた。以前から学校にな  
じめず、北杜に来てからも  
欠席の日が続いた。はつき  
りした理由はない。ただ、

体が動かなかった。

職業安定所の職員の心な  
い言葉に深く傷ついた。「同  
じような目には二度と遭い  
たくない」。無料の求人誌  
で職を探すようになった。

田舎が嫌いで、山梨を出  
た。刺身のつまを作る千葉

## 「自分のせい」心折れる

の工場が最初の職場だっ  
た。1〜2年働いて辞めた。  
どこか別の場所に華やかで  
楽しい仕事があるはずだと  
そう信じていた。

不登校経験のある中卒者

という学歴と、職業安定所  
でののしられた体験は強い  
コンプレックスになっていた。  
求職も、履歴書が要ら  
ないアルバイトや派遣、委  
託、日雇いばかり。コンピ  
ニ、コールセンター、キャ  
バクラと、不安定な職場を  
なった製紙会社では、不



部屋にこもりパソコンの  
画面に向き合う。インタ  
ーネットは外とのつなが  
りを保つ貴重なツールだ  
――北杜市内

しかし、仕事の覚えが悪  
く、周りに迷惑を掛けた。  
小さなほころびが、次第に  
不自信という大きな穴とな  
って、周囲に広がっている  
ように思えた。不安は強ま  
るばかりだった。「すべて  
自分のせいだ」。そう思い  
込んだ。

日に日に自分の居場所が  
なくなっていく。ある日、  
心の中で、張りつめていた  
糸がぷつんと切れたような  
感じがした。当分休まず  
と上司に申し出て、アパー  
トにこもった。やがて会社  
の休業手当も切れた。  
北杜の実家に戻るしかな  
かった。

# 扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える

## 第1部 どうして私が… ③

8月16日正午すぎ、永嶋聡さん(45)―北杜市―はJR甲府駅内の飲食店にいた。午後1時から、ひきこもりの講演会が県立図書館で開かれる。それまで時間をつぶしていた。

都内の会社を辞め、実家にひきこもって5年がたった。多くの人が往來する場で、周りに目を配っている自分に気付いた。知っている人間に会いはしないかと警戒している。部屋から外に出られるようにはなかったが、周囲の視線は、やはり気になった。

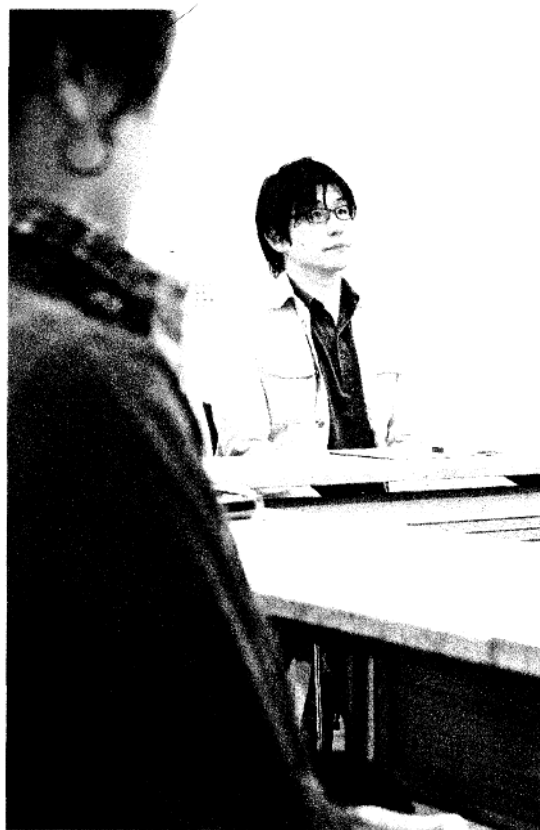
傷つき、実家に舞い戻った当時、人が怖かった。「40歳でひきこもった自分に

## 同じ境遇、集いで共感

は、自室以外に居場所はない。そう思い込んでいた。外出できるようになったいま振り返ると、格好を付けていただけだと思う。不登校の経験、職を転々とした過去、そしてひきこもり。相手に自分を知られるのが怖かった。

なぜ、そんなふうに思い

## ありのままに 一歩前に



込んでいたのだろう。自転車に乗れるようになると、それまでなぜ乗ることができなかったのか分からなくなる。そんな感覚に似ている。挫折を糧に、立ち直りのきつかけをつかんだいま

だからこそ言える。

「山梨」ひきこもり。自室のパソコンで新しい居場所を探す。7月末、ひきこもりの経験者による、集いの場への参加呼び掛けをネット上に見つけた。県内の会

場に足を運び、その後、都内の集いにも参加した。多くは年下だったが、みんな人の話に耳を傾け、反論したり責めたりする声は一切なかった。何より同じひきこもり同士、共感があつた。

少しづつ人とのつながりが生まれ、県立図書館での講演会の情報が入ってきた。親の会と当事者の会もあるという。興味を湧いた。開始時刻前に会場入りすると、まだ設営が終わって

ひきこもりの当事者の集いに参加する永嶋聡さん。自分を隠すことなく、自然体でいられる「居場所」だ

―甲府市内

いない。机と椅子を並べるのを手伝った。こんなに来るのかなと思つたが、100人も人が集まつた。同じ境遇の人や保護者がこれほどいるなんて。すつと、肩の力が抜けた。

8月末、東京・渋谷に出掛けた。都内の集いで知り合った人からネットビジネスについて学ぶためだ。40代半ば。正規社員として働くのは難しい。ならば、自分で仕事をつくり出すしかない。

ここ数カ月で驚くほど前向きになった。ひきこもりの経験のある人たちと出会い、「居場所」を見つけたからだろう。他人を避ける

ことも、自分を否定することもない。過去を認め、自分をありのまま受け入れる。そこから一歩を踏み出そうと思えるようになった。

最近、人の役に立ちたいという気持ちが日増しに強くなっている。仕事をしたい。最初はボランティアでもいい。他人とかかわり、多様な社会の中で生きていく。それが人としての、本来の「居場所」だと思うから。

5年前、逃げるように実家の自室に戻り、この手で強く閉めた「扉」をいま、ゆっくり開けようとしている。不安は消えていない。でも大丈夫、きつとうまくいく。

24面に「ひきこもりの親の会 甲府で初会合」の記事を掲載しています。

# 扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える

## 第1部 どうして私が…④

家族が仕事に出掛けて、静かになった居間にひとり。イヤホンを耳に詰め、好きなロックバンドの音楽を聞く。夕方に母親が帰宅するまで、時間が過ぎるのを待つ。

モモコ(仮名、都留市)は小学1年の時に不登校になり、何年もこうして過ごす日々が続いている。4月に22歳になった。

スマートフォンを手に、インターネットで同級生と連絡を取る。最近よく出るのは、誰がどこで働いているとか、誰の就職が決まったという話題。「何しているの」と近況を尋ねられるのが苦痛だ。学校に行っているわけでも、働いているわけでもない自分に、返す言葉はない。

友達はいなくなった。友達はみんな大人になっていく。仕事やアルバイト

## 出たいけど怖い、でも出たい

をして稼いだお金で、お気に入りの服や靴を買い、きれいに着飾る。お化粧も上手だ。1人だけ、いつまでも子ども。置いてけぼりの気持ちが消えない。

5月、家から離れた場所にあるドラッグストアで、レジ打ちのアルバイトを始めた。小学生のころからほとんど家にいて、働くのは初めての経験。みんなに少しでも追いつきたい。アルバイトをすれば自分に自信が持てるはず。母親が車で



## なぜできないんだろう

送迎してくれた。

研修でレジの使い方や言葉遣いを教わった。初めて

知ることばかり。思えば、分からなかった。不安と緊張で、頭の中はごちゃごちゃで、店の仕組みもよく

息ができる気がした。家に帰ると疲労で動けなかった。

みんなと違う道を歩いて、もう15年たった。

家族がいなくなった自宅の居間でひとり過ごすモモコ。人目が気になって、外に出るのが怖い。都留市内

接客もお金の受け渡しも、うまくいかない。「いらっやいませって、ちゃんと言わないと」。先輩に注意されて、自分の声が周りに聞こえていないことに気付いた。硬貨を数えるだけでパニックになった。どうして、こんなこともできないんだろう。

何より耐えられないのは、仕事が終わるまで店から出られない息苦しさ。労働時間はタイムカードで分単位で管理されている。建物から外に出て、ようやく

何度目かの出勤の日、出掛けようとしたら気分が悪くなった。店の駐車場で着くと、今度は足がすくんだ。車から降りられない。バイトに行きたいのに体が拒んでいる。運転席の母親が店に電話をかけ、欠勤の連絡を入れる。1人で何もできない。悔しい。涙がこぼれた。

「無理じゃなくていいよ。もう辞めよう」。気遣ってくれる母親の言葉がつかない。ようやく一歩を踏み出したのに、元に戻るの嫌だ。けれど、これ以上踏み出せない。アルバイトを始めて1カ月。母親が退職の届けをしてくれた。自分のことなのに、なぜ自分でできないのか。

# 扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える

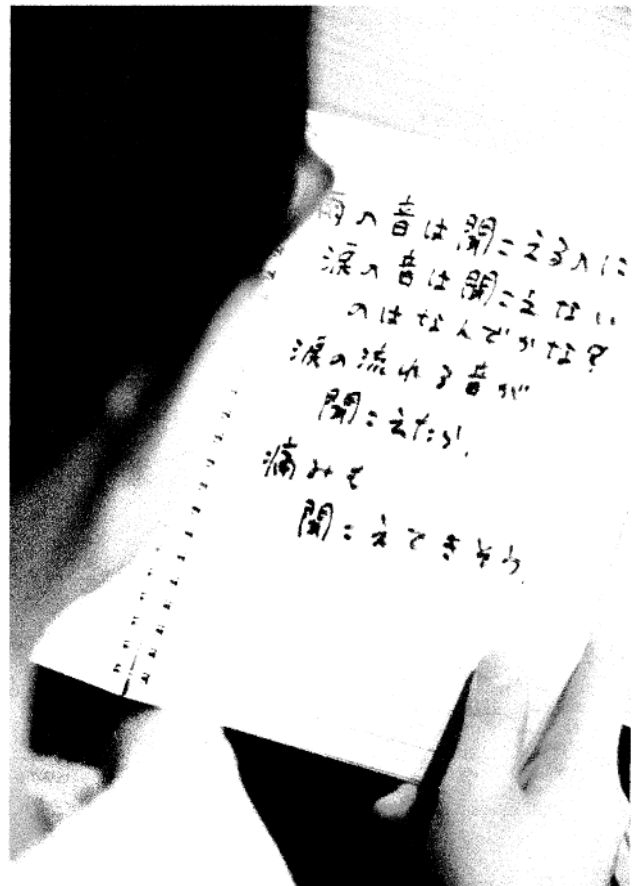
## 第1部 どうして私が… ⑤

悲しい。悔しい。心が波立つことがあると、モモコ(22)「仮名、都留市」はペンを取り、ノートに思いをつづる。読み返すと、「痛み」という言葉をよく使っているのが分かる。心の痛みは目に見えない。見えなから、人には分からない。

## 日記に託した心の声

### 見えない痛みを文字に

5人きょうだいの末っ子。兄も姉も、ちゃんと通学できた。どうして自分だけ。答えが見つからない問いが、重みを増していく。外に出ることを考えるだけで息が荒くなり、胃のあたりが締め付けられるように。心と同じくらい、体もつらい。友人、学校とも距離が開き、中学校には1日も通



口にできない思いをつづったノート。波立った気持ちも、文字にすることで不思議と落ち着く

まれた。今になって母親は言う。「ずっと言いたいことがあったのに、その気持ちに気付いてあげられなかった。だから長引いちゃったんだね」

母親との会話が多くなると、連鎖するようにほかの家族と交わす言葉も増えていった。笑顔も見せることができた。ここにいていいんだと思えるようになって。家が安心できる場所になると、目は「外」に向いた。

学校に行けなくなったのは小学1年の2学期だった。仲の良かった友達に、ある日突然「もう一緒に帰らない」と告げられた。理由は分からない。「死ね」と言われたこともある。学校は怖い場所になった。

毎朝、登校時間になると体を震わせて泣いた。母親に「行かなくちゃだめ」ときつく言われても、担任の先生が迎えに来てくれても、外に出られなかった。行かなければいけないことは分かっていたのに。

えなかった。

母親は育ち盛りのきょうだいの世話や、祖母の介護に追われていた。せわしなく家の中を行き来する姿に、声は掛けられなかった。気持ちをとめ込んでため込んで、時々泣いたり暴れたりはき出した。

言っても無駄だと思う一方で、一人であるのもつらかった。家にも学校にも居場所がない。なぜ、ここにいてるんだろう。自分の存在価値が分からなくなっていった。

唯一自分を表現できたのが、小学生のころに書き始めた日記だった。その日の出来事を記し、最後の1行

中学生になると、いくつ

かの言葉をつなぎ合わせ、一言も交わさなかった母と親との関係に変化が訪れ

た。絡まった糸がほどけるように、少しずつ会話が生じた。

# 扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える

## 第1部 どうして私が…⑥

小学1年で不登校になったモモコ(22)仮名、都留市。学校や友達の間で自分を磨き、他人や集団の中に「自分の居場所」を見つけてる。そんな多感な時期のほとんども、自宅の居間で過ごした。

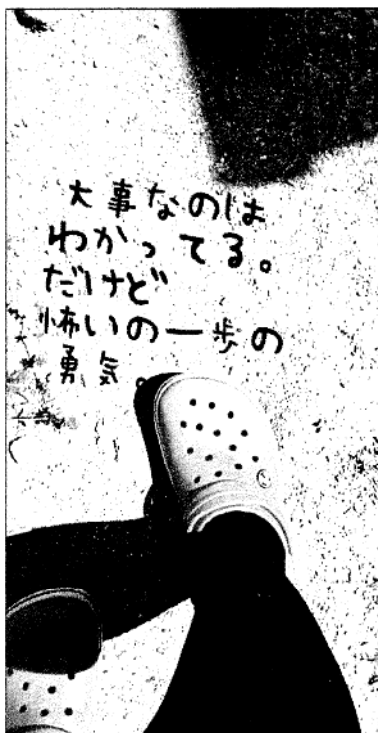
二十歳を迎えるのを前に、少しずつだが自分の気持ち打ち明けられるようになり、両親やきょうだいの会話は増えた。心に余裕がある時は、家族以外に話し相手がほしい、と思えるようになった。

## 同じ悩み語る場へ

ふと思いついて同級生にメールを送ってみた。なかなか返信がない。みんな仕事があり、学業がある。自分とは違う暮らしを送っている人たちだから、仕方がない。

## 出られたよ、話せたよ

母親つながりで、似たような境遇にある同い年の女性と連絡を取り合うようになった。「いつか会おうね」とメールを交わしてから何年もたつが、彼女の顔を見ない。「いつでもいいよ。たいてい親ばかりで、自分



スマートフォンアプリを使い、自ら撮影した写真にメッセージを添える。自分と同じような悩みを抱える人に見てもらおうと、「ひきこもりは一人ではない」と知ってほしい

他人の視線が怖くて電車にもバスにも乗れない。家族に遠方への送迎を頼むのも、気が引けた。山梨にいる限り、同じような境遇の人と出会うのは難しいと思

ある日、何げなくフェイスブックで「ひきこもり」と検索してみた。いくつかの当事者グループがヒットした。書き込みを目を通す。そこには、日常生活の苦しさや過去の挫折がつつられ

とまった。「山梨にひきこもり当事者の居場所をつくりたい」。本当に山梨で？半信半疑だったが、行ってみないと強く思った。男性宛てにコメントすると、すぐに返事が届いた。「ぜひ、来てください」

8月16日、甲府市の県立図書館で開かれた当事者会に母親と出向いた。会場のドアを開けると、早くも数人の男性が座って話をして

いた。自分以外の「ひきこもり」の人に会うのは初めてだった。「ひきこもり」なのに、みんなどこにいます。不思議な感覚だった。「まずはみなさんのお話を」。司会の人から促され、順番に経験や考えを話して

いく。みんな堂々としていて、自分の番が回ってきた。氏名と普段の生活が、いま思っていることを言葉にした。

うまく話せてる？ 分かってくれない？ 長いかな？ 話している間、周りの反応が気になった。あれほど怖かった他人の視線。向けられていた視線は優しさに満ちていた。

予定の3時間は、あっという間に過ぎた。15年以上胸の奥にあった、みんなの前に出たいという気持ちを、ようやくかたみにできた気がした。もったいない。また来れるといい。会場を後にするとき、何度も何度も振り返った。やっと見つけた「私の居場所」を。

# 扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える

## 第1部 どうして私が… ⑦

「足元 気をつけてください。転ばないようにね。」  
建一(36)は仮名、東京都葛飾区は勤め先の介護施設で、95歳の女性に声を掛けた。トイレに行くという女性の動きを注意深く見守りながら、手を差し出す。

3年前まで笛吹市の実家にひきこもっていた。最初は5年、次は7カ月。他人のことを気遣えるようになるなんて、夢にも思わなかった。

3人きょうだいの末っ子。栃木県の大学を卒業した後、家に戻って司法書士

## 責めなかった両親

の資格を取る勉強をしていた。学費を稼ぐため近くの工場でアルバイトを始めた。それが最初のつまづき。

仕事場ではいつも孤立していた。あいさつをしても

## 待っていてくれたんだ

無視され、休憩も昼食もひとりで。同僚の女性は「話しかけないで」と避けていく。理由は分からない。

大学を卒業して2年目に試験に落ちた。他人にも、将来にも、希望が持てなくなっただけの時だ。

自宅の階の6畳間。1人に、それほど時間はかからず、悪いく、悪い方、悪い方、悪い方。死のう。部屋の窓に、目張りをし、薬を飲んで、とした不安が絶望に至るの、練炭に火を付ける。目が覚めた。



自転車で行く建一。3年前まで笛吹市の自宅にひきこもっていた。東京都内

めると、日付が変わっていただけだった。

その日から自室に閉じこもった。なぜなのか、うまく説明できないし、今もよく分からない。食べて寝るだけ。体重は100kg近く増えた。1週間風呂に入らず、歯も磨かない。人に見られるのが恥ずかしくて、ますますこもった。人の気配が怖い。昼間は息を潜め、夜になるとようやく楽に呼吸ができる。そんな感覚だった。

昼夜逆転の暮らしが何年も続いたが、父母は不思議なことには責めなかった。お

はよう「体調はどうか。いづ、突った言葉でわが子を責める。インターネットには、ひきこもりを機に親子関係が崩れていく様子が赤裸々につづられていたりもする。自分は思われている、と痛感した。

料理がつくれるんだから、大丈夫よ」と喜ぶ両親。2人が苦しんだり悩んだりしている様子は見たことがない。ひきこもりの子を持つ親の会に参加していたと聞いたのは何年か後のこと。葛藤の中で、立ち直る日がくるのをじつと待っていた。くれたのだ、と知った。

「甘えるな」「もっと頑張れなさい」。ある日突然、ひきこもりの親となった人たちはすぐに受け入れられず、突った言葉でわが子を責める。インターネットには、ひきこもりを機に親子関係が崩れていく様子が赤裸々につづられていたりもする。自分は思われている、と痛感した。

気がつけば三十路も近い。両親は顔のしわが目立つようになった。ゆっくりと、だが、確実に老いていく。自分も、父母も。このままじゃいけない。自分の足で立たなければ。

テレビで、ひきこもりを支援する団体が千葉県にあることを知った。寮生活で社会復帰を目指すという。行ってみたい。両親がすぐに連絡を取ってくれた。5年間ひきこもっていた家を出る日が、やってきた。

# 扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える

## 第一部

どうして私が… ⑧

5年間のひきこもりを経て、建一(36)は仮名、東京都葛飾区は、29歳になる1カ月前に笛吹市の実家を出た。向かった先は、当事者を支援する千葉県全寮制の施設。運営者と向き合うと、いきなり「とにかく働きなさい」と指示された。すぐに働けるのならここには来ません、という言葉

をのみ込み、施設が経営する料理店で働き始めた。しばらくして施設側に支払う費用をめぐってトラブルが起きた。運営者と折り合いが悪くなり、3カ月で退所した。

その後、一人暮らしをし

## 経験者との出会い

### 「一人じゃない」が力に

た。

アルバイトで働き始めた

古本販売店では、客が来る

たびに足が震え、手のひら

は汗でぐっしょり。「いら

っしゃいませ」の声ももうわ

ずる。買い取り交渉ができ

て一人前だが、接客すらで

きない。「使えねえな」。刺

受けながら、古本を整理す

るしかなかった。どこも長

続きせず、笛吹と出会った

ことが大きかった。

「声の出し方を忘れちゃ

う」「物音や人の気配に敏

うに働き、自立したい。そ

れにはまず社会に出る準備

数の支援施設に出入りする

中で、ひきこもりの経験者

の思いが、2度目のひきこ

もり生活での孤独感や絶望

感を打ち消した。

同年代の人たちと同じよ

うに働き、自立したい。そ

れにはまず社会に出る準備

自分だけではないと安堵し

た。「ひとりじゃない」と

の思いが、2度目のひきこ

もり生活での孤独感や絶望

感を打ち消した。

同年代の人たちと同じよ

うに働き、自立したい。そ

れにはまず社会に出る準備

毎朝5時に家を出て、高

速バスで団体の事務所に通

う。出入りする人にお茶を

出したり、打ち合わせの場

に同席したり。あいさつか

ら会話ができるようになり

り、世間話を自分から切り

出せるようになった。履歴

書を空白期間を上手に説明

する方法も学んだ。

スタッフは「慌てず焦ら

ず」と伴走してくれた。就

業意欲が高まり、いよいよ

ハローワークへ。フォロー

を受けながら通い詰め、面

接を経て葛飾区の介護施設

に就職が決まった。

仕事はお年寄りの相手。

話に耳を傾け、ゆっくり相

づちを打つ。うまくできて

いるか不安だったが、相手

が笑顔を見せてくれるとう

れしかった。失敗もしたけ

れど、一生懸命に勤め、3

# 扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える

## 第1部 どうして私が…⑨

建一(36) 仮名、東京都葛飾区Ⅱが笛吹市の実家でひきこもっていた生活から脱し、都内の施設で介護職員として働き始めて2年がたった。職場の人間関係も良好だ。ただ、自分だけ社会に出られたことに後ろめたさも感じている。

立ち直る過程で何人ものひきこもり経験者と知り合いになったが、多くがひきこもりに戻っていった。気になって、その1人にメールを送ったことがあった。差し障りのない話題から入り、体調のことを聞く。何度かやりとりした後、「会いませんか」と誘ってみた。

「僕にはもう関わらないでください。あなたは僕にとって向こう側の人だから」

## 「一步を」思い重なる

「ら」。突き放すような冷たい反応に驚き、それは違つと心の中で叫んだ。自分が同じ境遇になっていたかもしれない、人ごととは思えない、と。

「居場所」が必要だ。同じ経験を有する人と出会い、ひとりではないと知ったことが、ひきこもりから抜け出すきっかけになった。今度は自分が伝える番だ。実家にこもっていたこ



この連載へのご意見や感想をお寄せください。  
郵便番号400-8515、甲府市北口2の6の10、山梨日日新聞社編集局「扉の向こうへ」取材班 (ファクス055・231・3161、電子メールkikaku@sannichi.co.jp)。

ひきこもりの当事者が集まる居場所、ほかの経験者の声に耳を傾ける建一。気持ちが楽になる場が、山梨にはもっと必要だと思っている。Ⅱ甲府・県立図書館

いどの不安がよぎった。2週間悩んだ末、実家に電話を入れ、ひきこもりの人が集う場所をつくりたい、迷惑をかけるかもしれない、と告げた。「ぜひ、やりなさい」。母親の声が背中を押してくれた。

早速、交流サイト「フェイスブック」で参加を呼び掛けた。「山梨にひきこもり当事者の居場所をつくれ」と考えていますが、果たして人が集まるか不安です。書き込みから1時間ほどで「私も当事者です」

日に全国組織の「ひきこもり親の会」が、甲府・県立図書館で講演会を開くという情報が入ってきた。できることなら当事者の集いを合わせて開きたい。フェイスブックで声を掛けると、すぐに参加の申し込みがあった。

講演会当日。会場で司会から発言を促された。この日、別室で開くことになった当事者の集いをPRしていいという。マイクを握って立つと、講演を聴きにきたひきこもりの当事者や家族の顔が目飛び込んできた。100人はいる。足が震えた。

「私は元ひきこもり当事者で、山梨で居場所づくりをしています。興味のある方がいれば、ご参加いただけます」と。声がうわすつたが、言いたいことだけ言って頭を下げる

## 当事者たち 交わる人生

ろ、インターネットで何度も検索した。「ひきこもり」同じように探している人が「山梨」「居場所」…。求

めた先はなかった。いまでも同じように探している人が「山梨」「居場所」…。求

る、インターネットで何度も検索した。「ひきこもり」同じように探している人が「山梨」「居場所」…。求